今日の家庭

（時　言）

○今日の我國の最も憂慮すべきことは、家庭生活の實態であるまいか。世相憂うべき問題は多いが、その源を深く探ぐれば社會の缺陷というなかにも、家庭生活の在り方に歸するといつても過言でなかろう。家齊らて國治まるというが、家齊わぬこと斯くの如くして、國の治まることも難いであろう。また、身を修めて家を齊うというが、家齊わぬこと斯の如く甚しくして、修身の實を擧げ得ることも難いであろう。修身齊家の理想的順序も望ましいことに相違ないが、齊家修身の現實的順序も、人間修身の自然の途である。今日の如きにおいて、特にそれを痛感する。

○あの、浮浪に走り、不良に陷る子どもらは、どこの家の子か。あの、放縱に赴き、犯行に墮する青年らは、どこの家の息子と娘らか。可愛そうに彼らの多くには家がない。家はあつても家庭の破れている崩れている。浮浪も又不良も、放縱も犯罪も、家庭にいられない子、家庭に抱かれない子、家庭に樂めない、彼等の人生最大の不幸の結果にほかならぬのでなかろうか。その不幸は結果においてある前に原因にあるのでなかろうか。子どもと青年ばかりではない。親において先ずそうなのかも知れない。

○ Broken home という言葉がある。社會學上、現代家庭の悲語である。悲語というよりも痛語である。しかも今の我國では此の悲痛家庭が現代社會問題を超えて餘りにも悲痛である。餘りにもというのは、現代社會現象としての失業とか、親の精神薄弱とかいわゆるスポーペリズムの產物たる以上の深刻性をもつからである。その結果の悲痛の心理も亦、一段と深刻であり、生活以上人間性格をブローリする。

殊に、家族同一の家に住むことの出來ないことは、所謂 Broken home ではないが、その家族に及ぼす結果は恐らく同じことあるを免れない。子女の生活的關係——敢て影響といわずたゞ關係というだけにしても——は、必ずや家庭の實を擧げ難いものがある。家庭とは、その內容的實質は別として、兎にも角にも、親子共同の生活の場として、子女の教育性をもつものだからである。戰時中は兎も角も、疎開家庭に、今尙お此の悲痛が多くある。

○インフレのために、窮乏と濫費とが、それぞれの家庭生活の不調の理由となり、破たんの原因となる。窮乏の悲痛はもとよりとして、濫費の家庭をその眞摯な生活から破かいする危險は甚しい。その不正當な收入は富みをつくらずして不健全生活を作る。子女の生活も亦その不健全の中に害われて、非教育的などころでなく、もち來すものは人生の頹廢のみである。悲慘はいずれにおいても變らない。

○こうした家庭的悲慘とが、可憐な幼兒にも被らされていることを思うに慄然とする。